

○今日は大きく3点、1つ目、私の生い立ち、2つ目、私にとっての手話、3つ目、養育・教育における手話—手話を獲得するための保障について、お話ししたい。

○まず私の生い立ちについて。

家族は4人。父と母と兄と私。4人とも聞こえないデフファミリーで、家の中では手話で話をする。

私が小さい頃、母は手話と音声言語を使っていた（声を出しながら手話をする）。

自分が手話と日本語の2つを理解できたのは、母のおかげと思う。

父は青森生まれ。青森のろう学校で育った。高校を卒業したあと、仕事で東京に移ってきて、仕事をしながら手話の講師活動などもしていた。

母は東京生まれで聞こえる人の通う学校でずっと育った。ろう学校の経験はない。

高校まで口話教育でずっと育った。このため、手話は使っていなかった。高校を卒業したあと、職業訓練校に通った。そのときに聴覚障がいのある友だちと出会った。

その中で手話を獲得していった。そのあと父と結婚し、生まれたのが兄と私の2人。

兄は中学校までは聴覚支援学校に通った。高校からは聞こえる人の通う学校に通った。どうして聞こえる人の学校に替わったかと聞くと、聞こえる世界を体験してみたい、将来のことを考えると、社会に出たときに周りは聞こえる人ばかりなので、

自分一人が聞こえない、その時にまごまごするのではなくて、聞こえる人たちの世界に挑戦してみたいという思いがあって、聞こえる人の学校を選んだと聞いた。今も東京で働いている。職場では音声言語は使わずにすべて筆談でやり取りをしている。聴覚障がいのある友だちと話すときはもちろん手話で話をする。

○このように、家の中では聞こえない家族ばかりですので、手話で話をする。

面白い話がある。母だけが口話で育ってきたため、私が小さいころ父親とけんかをするときには、怒ってしまうと、母はどうしても音声言語が優先してしまっていて、口で話してしまう。父親は聞こえない。だから、母は筆談で紙に文章をいっぱい書いて、怒っている言葉を全部書いて父親に話す。父親はそれを見て読んで筆談で返す。また腹を立てて書いて返すという筆談のやり取りでけんかをしていた。私が小さいときにそんな様子を見てびっくりした。普段は手話で話すのが、怒ると音声言語が優先してしまう。しかし、そのうち、そんなけんかも手話でやり取りするようになった。手話をずっと使っている家庭環境で母も生活をしていて、手話の力がぐんぐんついていったのだと思う。

私たち兄弟も、同じように手話が身に付いていったと思う。

○家族の中での日本語の教育について。

父親の親戚、母親の親戚は、すべて聞こえる人たちばかり。親戚の人たちと話すときは音声言語ばかりで話をする。父親は音声言語は苦手。でも、家族はそのような父親を理解しているので、大事な話のときは筆談をして対応するようにしている。お互いに書いている内容を見て、確認し合って伝え合う繰り返しをしている。

父親は、口話は苦手と言ったが、いつも新聞を読んだり、本を読んだりしており、内容を父親に質問すると、しっかり答えてくれる。ということは、文章を読む力があるということ。

母は、口話教育で育ったが、頭の中で音声言語と手話が切り替えられるのだと思う。商店街で買い物をするときには音声言語でやり取りをしている。以前、パートで仕事をしていたときがあったが、そのときにも簡単な内容を音声言語で話をしていた。大事なことや確認しなければならないことは、文章に書いて筆談でのやり取りをしていた。役所や病院に行くときには、必ず手話通訳を呼んでいた。そのとき母は、音声を使わず、手話のみで会話をする。音声言語は手話を通訳する人に任せるという形を取る。

父も病院や役所では必ず手話通訳を頼んでいた。私は、そのような家族の状況の中で、日本語はやはり大事で、筆談でやり取りできるし、会話の方法に、日本語があるという認識であった。

○私の教育歴について。

私の聴力は右が100デシベル、左が60デシベル。今は、補聴器は付けていない。6カ月から補聴器を使い始めた。私は保育所に、兄はろう学校の幼稚部に通っていた。そして、私は聴覚支援学校の早期教育部に、兄は幼稚部に入った。

小学校まではろう学校に通い、武蔵野市立第一中学校に入学。スポーツが得意で、聴覚支援学校以外との試合で楽しさを感じたが、周りがすべて聞こえる人になるとどうなるのだろう、心配していたときに、難聴学級のある中学校があった。

私がどのようにして日本語、手話を身に付けたかということ、小さいときは、聴覚支援学校と保育園に通い、家の中では手話で会話をする。

聴覚支援学校では手話と口話を使う。保育園では音声言語だけを使う。

そのような環境の中で、自然と私の中に身に付いていった。

母語は何かと聞かれると、手話なのか、音声言語なのか、迷ってしまうが、手話がベースにあるから、話ができることは確か。

○手話と音声言語の中間で育ってきた。

でも、まず、目に入ってくるのは、手話。

そして声も聞く。

例えば、コップがあるとする。手話ではそれぞれの上に輪っかを作ってコップとい

う表現をする。ペンがある。コップとかペンとか、そのような単語はまず手話で、目で見えて覚えた。そうして、生活の中で自然と手話が出てきて、文脈が作られて手話での会話が成立していった。

日本語の場合だと音声言語で話をされても、何を言われているのか、あいまいで分からないところがあった。

文脈の理解については、まず手話があって、そのあとで日本語として文脈を理解できた。

まず、手話があって、その上に日本語を重ねるという感じで、私の言語が獲得されていったと思う。

自分の思いを一番表現できるのは手話だった。

母語は何かと聞かれたときには、日本語なのか、手話なのかと迷うこともあるが、第1言語は何かと聞かれると、私は手話。

○第2言語の日本語はどのように獲得したのか。

まず、ろう学校の幼稚部に行くと発語の訓練がある。苦しかった思い出はない。すぐに慣れたし、発音の訓練をするときにお菓子をもらえたので、頑張ろうと思えた。また、たまたま音声もきれいに発音できた。でも大学に入ったあと、いろいろな方の講演を聴くと、口話の訓練は苦しかったという方が多かった。

○そのような幼稚部の経験があって、小学部に入った。

聴覚支援学校でよかったことは、助詞の習得。

授業で黒板に「私はりんごが好きです」と書かれる。「は」や「が」を強調する。そこで助詞というものがあるのだと自然と知ることができた。そして、そういった文章は手話で理解する。手話がベースにあったので、そのあとで日本語を見て、日本語にも文章があるのだということが、自然に身に付いていたと思う。

聴覚支援学校だから、「私はりんごが好きです」ということを、ゆっくり進めてくれたが、聞こえる人の通う小学校に行っていたら、日本語が十分に分からないまま育っていったのではないかなと思う。

○「私にとっての手話」について。

私は手話で育ち、手話で言葉を覚え、そのあと日本語を覚えた。

もし手話がなければ、私の人生はすべてなくなってしまったも同然。

自分の言葉で自分の感情、うれしかったこと、悔しかったこと、怒っていること、そのような感情のすべてを表現できるのが手話。今は怒っているとか、今は悲しいとか、それは手話を見たら分かる。伝え合うことができる。

○私の思考や記憶の様式はどのようになっているのか。

いろいろなことを考えるとき、頭の中には映像がある。頭の中にダンスの引き出しがたくさんある。例えば、ここの引き出しの中に小学校1年生の記憶が、このダンスの引き出しの中には並んでいるなどか。最近の出来事はここの引き出しに入っているなど、いろいろな引き出しがたくさんある。その引き出しの中から、いろいろなものを引き出してきて、例えば、引き出しの中から引っ張り出してくる。

みんな同じ記憶方法だと思っていた。

大学院に入り学んでいく中で、聞こえる方のほとんどは、映像的な記憶方法はないと聞いた。非常に驚いた。

○手話の表現をするときは、頭の中がビデオテープの映像が流れているような形になっている。その映像を手話で引出していくような形。何か記憶を思い出すときには写真が出てくる。

例えば、今日皆さんとここでお会いした。皆さんが並んで座っている。この写真が頭の中に浮かんできて、その場面を手話でお話しすることができる。

手話の場合は写真や映像が頭の中にあって、それを手話で引出して話をしていく。

○日本語にする場合はその映像を音声言語に変えていく作業が必要になる。

文章の場合、それを文章にして書いていかなければならない。

頭の中をフル回転して話をしていかなければいけないので、とても疲れる。

中学から高校生にかけては、ずっと口話で生活をしていた。

家に帰ると手話で話ができるので、頭をぼうっとしてリラックスさせて話すことができた。また、聴覚障がいのある友だちと出会うと手話で会話ができる。そんな場もいくつかあったので、学校の中では口話ですごく疲れるが、家に帰ると手話でコミュニケーションが取れ、また頭がすっきりできる。そして、また学校へ行くという生活をしていた。

もし、手話がなく、ずっと日本語で生活する環境だったら、本当に引きこもっていたのではないかと思うほど。

○私にとっての日本語は何か。

私の場合は、たまたま口話ができる。手話ができない聞こえる人の中にいたら、声を出して話をする。うまく伝わらない場合や大事な話は筆談。だから、口話は必ずしも必要とは思っていない。読んだり書いたりすることができれば、筆談でやり取りできる。このような教育はとても必要。

○どうして口話が必要でないか。

口の形を読み取るために集中しないとイケない。ぼうっとして口の形を見ることはできない。読み取れない。口の形に集中して、今はこういう文章を言っているのだろうか、頭の中でいろいろなことを思い浮かべ、一生懸命文章を考える作業が頭の中で行われる。口話を読み取れないことがあると、後になって「さっき、あの人はああいうことを言っていたのかな」と思い付くことがあるが、そのときは既に遅い。口の形に集中しなければならないので、感情も生まれてこない。感動することもない。本当に辛い苦しい思いを話されても、口の形ばかり一生懸命読んでいるので、感情が伝わってこない。手話なら、思いや感情も伝わってくるし、一緒に感動することもできる。

○中学、高校のときは、聞こえる人の通う学校に通っていたので、授業も口話。先生の話は分からない。朝から夕方までずっと口話で、ずっと口を形を見続けているので疲れてしまう。

だから、自習のほか、手話のできる家庭教師に教わって勉強した。

友だちの例だが、大学受験も難しいと成績と言われていたが、手話のできる家庭教師に教わると、勉強の中身を、目で手話で教えてもらい、伝えてもらうことができたので、成績が上がり、大学に合格した。口話だけでは勉強は分からなかったが、手話なら分かったと言っていた。

○もう1つ、日本語の文法について。

例えば、「僕がカルタを探す」と「僕をカルタを探す」という言葉がある。

聞こえる方なら、違いは分かると思うが、聴覚障がいのある者には、分からないときがある。

だが、手話でしっかり表現すれば、そうした文法、助詞による意味の違いもすぐに理解できる。

やはり手話は大事な言語。

そのように手話にも文法があって日本語と違うことを、きちんと手話で伝えられる力を持っている、聞こえる先生たちが少ないのが残念なところ。

○友だちとのコミュニケーションについて。

小学校のときにはろう学校に通って。友だちとは手話で、先生方は時々口話を使う先生や手話が苦手な先生がいた。そのようなときには口話で話すなど、人に合わせて切り替えた。

聞こえる両親のもとに生まれた聴覚障がいのある友だちは、使える手話も少ない。そのような友だちと手話で話をするときは、私の手話は伝わらない。だから、私が手話のレベルを下げて簡単な手話で話をした。そのような友だちも5～6年生にな

っていくと、自然と手話で話ができるようになっていた。手話は、手話の環境があればどんどん上達していくものだと思った。

○中学校、高校では口話メインで学校生活を過ごしていた。

高校は、甲子園を目指すため、聞こえる人の通う学校を選んだ。甲子園という目標と、育ってきた聴覚支援学校や家族など、私のことを分かってくれる居場所があったので、頑張り続けることができたが、高校時代は友だちはできなかった。口話での会話の中に付いていくことができず、友人という友人もできなかった。

大学では、聞こえる学生にホワイトボードに書いたり、身ぶりをしたり、音声言語やいろいろな手段を使って、私が水泳を教えることなどをつうじて、友だちができた。「聞こえないって、どんなこと」と聞いてくれ、私の聴覚障がいについての理解も広がっていった。

○最後に、養育・教育における手話について。

一番大切なことは、幼少期からの手話との出会い。

私の家族は全員聞こえませんが、小さいときから手話でのコミュニケーションがあったが、聞こえる両親のもとに生まれた聴覚障がいのある子どもたちにはそのような環境はない。

手話との出会いの場が大切。

手話を獲得して生きている先輩との出会いも重要。

○手話にも方言がある。また、世代によっても表現が違う。日本全国いろいろな手話があるが、標準手話があるのかというと、まだそのようなものはないのではないかなと思う。

○一番伝えたいこと。

それは会話をするときのこと。日本語（音声言語）で話をする場合、分からないところが分からない。何か話しているが、意味が分からない、聞こえていない、情報がどんどん削除されている、聞きたいけれども、何を聞いていいのかも分からない。でも、手話なら「ちょっと待って。今の話、何」と聞き返すことができる、話が分かる、分からないところが分かる、養育や教育では、それが一番大事。そういう分かり合える経験の積み重ねが、日本語にも結びついていく。

○最後に、昨年度、手話をベースにして教育が行われている奈良県立ろう学校に、非常勤講師として行った際の経験について。

非常勤講師として行く前には、私は「手話は大事。手話で教育することが大事。音

声言語なんて必要ない、手話さえあったらいい、聞くよりも手話だ。と思っていた。しかし、実際には、今、人工内耳の子どもたちが増えてきており、人工内耳を付けているので、聞き取れる子どもたちも増えてきている。だから、音声言語がいいという子どもたちもいる。手話と音声言語を使う子どもたちもいる。その子どもの様子に合わせて教育をすることが大事だと分かった。でも、そのような子どもたちの中には必ず手話があり、手話で話をしていた。その間に時々音声言語が入ってくるという形。基本は手話。

○奈良県立ろう学校のスローガンがある。

「声が響き手話が弾む 希望のある学校づくりを目指して」。

音声は伝える。日本語も書ける。手話も使える。すべて使える。それがいいのだということ。手話を認めるのはもちろんのこと、音声も認め合う。でも、手話で伝え合えることができる、それがベース。そのことがあった上で、音声があり、子どもたちがそれぞれ伝え合えることができる。

○小さいときから、手話もある、声も出せる、いろいろなことができるのがいい。

聞こえる子どもと、聴覚に障がいのある子どもが、自分の言いたいことを伝えるために、どのようにしたら相手に伝えることができるのかを考え、音声や手話、いろいろな言葉を使って伝え合おうとする、伝え合う、分かり合う、その喜びがある、そのような環境が大事。

聴覚支援学校の先生たちについて。聴覚支援学校の先生たちがすぐに手話を覚えることは難しい。音声言語で話す先生も多い。でも、奈良県立ろう学校の先生たちは難なく手話ができる。そんな様子を見てとてもうらやましいと思った。